

自

身の離婚経験をきっかけに相談室を開設し、夫婦問題に関する女性たちのありとあらゆる悩みに答えてきた岡野あつこさん。2011年には24歳年下男性と電撃再婚し、小誌に喜びを語った。しかし3月、3年間の結婚生活に終止符を打つことを発表。離婚協議のさなか、別れを決意した胸の内を明かしてくれた

自分の力量不足が情けなくて

夫から離婚したいというメールが届いたのは、2月5日のことでした。じつはそれまでも夫から離婚をほめかされたことがあったのですが、それは喧嘩の時にありがちな、売り言葉に買い言葉的な発言。しばらく

するとケロリとしていたので、今回も初めは真に受けていなかったのです。ところが同じ内容のメールが翌日も、その翌日も、立て続けにきた。正直なところ動揺しましたね。真意を確かめるのが怖くて、返信できずにいたほどです。

でも、今、私は離婚の準備を進めています。やっと手に入れた幸せな生活を手放すのはしのびない。こんなはずではなかったのに、どこで間違ってしまったのかという戸惑いもありました。なによりも、夫を幸せにできなかった自分の力量不足を思うと情けなくて……。

その一方で、「ついに来たか」と冷静に捉えている自分もいました。というのも私は結婚当初から、今がどんなに幸せでも、離婚という結末を迎える可能性はあると覚悟していたのです。これはなにも年の差婚だから

らというわけではありません。自身最初の結婚生活や夫婦問題研究家としての経験を通じて、どんな夫婦であれ、価値観の違う男女が生活をともにするのは難しいことを熟知していたからです。

この結婚を決意した時、「たとえ離婚することになっても、私はなにもない人生より傷心を選ぶのだ」と思ったことを覚えています。自分の気持ちに正直に生きたいという意志を貫くことで得た、幸せな時間というものが確実にありました。だから彼と結婚したことは少しも悔いてはいないのです。

とはいえ、実際には自分の心をなかなかコントロールすることができませんでした。なかでも私の心を大きく支配していたのが、世間体。仕事のダメージにつながるのではないかとという恐れもありましたし、周囲

の「どうせ長く続かないだろう」という空気を痛いほど感じていたので、「やっぱりダメでした」と認めることには大きな勇気が必要だったので

でも世間体がなんだというのでしよう。考えるべきは2人の幸せな人生についてです。では幸せとはなにか？ 結婚とはなんなのか？ そもそも愛を貫くとはどういうことなのか？ こうした根源的な問題について改めて熟考してみること、私はかろうじて救われました。

出張から戻ると、部屋が水浸しに

24歳年下の彼と結婚したのは、11年の5月。前年の11月に知り合い、翌年4月1日から一緒に暮らし始め、バリ島で彼からプロポーズされて即

独占告白

年下男性との幸せな3年間に悔いはない カリスマ離婚カウンセラーが 24歳差婚に幕を引く理由

撮影◎大河内 禎



岡野あつこ

夫婦問題研究家、ライフアップカウンセラー
おかのあつこ 1954年埼玉県生まれ。立
教大学大学院21世紀社会デザイン研究科卒業。
91年に「岡野あつこの離婚相談室」設立。カウンセ
リング、講演、執筆、離婚カウンセラーの養成
など、幅広く活動する。妻のための離婚とお金
の話「幸せな結婚がしたいなら年収300万円の
男を育てなさい」など著書多数

座に婚姻届を提出したというスピード婚でした。

56歳まで必死に働き、一人息子を無事に育てあげた。事業もやっと落ち着いて、なにかあっても自分なら乗り越えられるという自信もついていた。でもなにかが満たされないと漠然とした不満を募らせていた私の前に、彼は絶妙のタイミングで現れたのです。大きな決断の背後には、東日本

大震災を経て、いつ死んでも後悔のないように生きるべきだと確信したということもありました。

とにかく一緒に暮らし始めた頃は、「こんなに幸せでいいのかな」と夢見心地で。毎日会っているのに、それだけでは足りなくて手紙を交換したり、夫から「あつこ、その歩き方はがさつだよ。足がガニ股になっていく」と注意されることさえうれし

かった。私に関心を持ってくれる夫の期待に応えたいと、内緒でO脚矯正のクリニックに通ったりもしました。

当時の自分を振り返ると、幸せボケしていたなと思います。私は浮かれた毎日の水面下で、不穏な空気が流れているのを見逃がしていたのです。

あれは結婚して初めて私の誕生日

を迎えた8月5日のこと。その日、私は出張が入っていたので、前日に夫がケーキを用意し、ハッピーバースデーを歌って祝ってくれました。ところが出張から帰ってきたら、部屋の様子がおかしいのです。壁には水をまいた跡があり、私の両親の仏壇は線香立てが水浸し。さらに夫からもらった手紙も、私の眼鏡もなくなっていました。そこで夫に「なんかヘンじゃない？」と尋ねると、私の留守中に遊びに来た夫の女友達の悪戯だというのです。さすがに「女友達って？」と違和感を抱きました。が、結局のところ、私は「やましいことはなにもない」という夫の言葉

を信じました。
哀しいことですが、夫の浮気は想定内でした。もちろんないことを祈っていたけれど、なにぶんにも若い夫のこと。浮気ごときにオタオタしては身が持たないと、これも結婚する時に覚悟していたことの一つです。真実を暴いたところで、いいことなんかない。だったら深い追いつないでおこうと、この時も考えました。

いずれにしても、女性の行動に一番驚愕していたのは夫だったのではないのでしょうか。その後、夫は私に似合う眼鏡を一緒に選んで買ってくれ、「あつこの両親に謝りたい」と自らすすんでお墓参りにも行ってくれ

だまされていてもかまわないから、一日でも長く、若くて素敵な彼との結婚生活を続けたかった

ました。

2人で探したお気に入りのタワーマンションから、部屋の区切りがないスタジオタイプのマンションに引っ越したのは、その直後です。責任転嫁もいいところなのですが、「こういう不愉快なことが起きるのはこのマンションのせいだ」と考えた私の提案でした。じつは私には、新居への引っ越しを機に、夫が独身時代に住んでいた部屋を引き払ってほしいという意思もあったのです。

それまで夫は、独身時代の部屋と夫婦で住むタワーマンションを行ったり来たり。私と暮らすマンションには帰ってこないこともあり、一人になれる場所がないと窮屈だという彼の言い分を受け入れてしまいましたが、やはりきちんとけじめをつけなくてはいけないという気持ちから、私は完全同居を望んだのです。

彼は、引っ越しを私のあてつけだと感じたのでしょうか。今にして思えば、夫婦の齟齬が始まったのは、この頃からだったような気がします。結婚式の準備に追われる最中に、私たちの結婚を快く思っていない女性が訪ねてくるという出来事もありました。でも、またしても私は、彼が

相手を傷つけまいとして曖昧な別れ方をしたのかな、とポジティブに捉え、深く追及しなかったのです。

こうして予定通り、10月4日の夫の誕生日に福島県的那須白河で結婚式を挙げました。続いて11月には、私の会社の設立20周年パーティー＆結婚パーティーを開き、その席で夫は「10年、20年、30年、一緒に歩こうね」と、素敵な挨拶をしてくれた。うれしくて涙が出ましたよ。

パーティーでは私は「瀬戸の花嫁」の替え歌を歌ったのです。「男だつたら浮気はせずにあなたのあつこ大事にしな〜」って(笑)。キツキツのウェディングドレスを着て、ずっと立ちっぱなしでなにも食べず、息継ぎもろくにしないで歌ったら、倒れちゃった。夫はつきつきりで見病してくれました。

12月にはシンガポールへ新婚旅行。憧れのマリナーベイサンズに宿泊した豪華な旅は、企画をしたのも、支払いをしたのも夫です。結婚した当初、周囲からは「お金目当ての結婚」

ではないかと思われていました。ですが夫は、一緒に外食へ行ったりデートの時も、コーヒーの一杯さえ私にお金を出させたことはありません。一度、仕事で不動産の買い取りをしたいからと、1800万円を貸してほしいと言ってきたことがあり、戻ってこなかったら……と少し疑ってしまったりもしましたが、きつくり返してくれました。

でも彼の仕事は思うよううまくはいかず、それが夫婦関係を続けていくうえで大きなネックになったことは否めません。彼は結婚前、不動産関係の会社で働いていましたが、結婚を機に独立。公私ともに新たなスタートを切ったのでした。

私から見ればままとみたいな会社設立でしたが、私が独立したのも36歳の時。当時の苦勞を思い出し、彼を応援したいというお節介な気持ち

子どもを 作りたいと 考えていた時期も

でも思ったんです。本当に愛しているのなら、彼の望む生き方をさせてあげることが出来るはず

を抑えることができませんでした。

たとえば、従業員に給料を払うのが大変そうだなと思えば、彼らに私の会社の仕事も手伝ってもらうことにして、私が給料を払う形態をとったり、仕事のやり方についてレクチャーしたり。もちろん、よかれと思ってくれたことではあったのですが、夫のプライドを傷つけてしまったのでしょうか。結婚前は私のことを、人脈もあって仕事もバリバリして「あつこはすごい」と言ってくれていたけれど、結婚してみたら、そっくりそのままコンプレックスになってしまったのかもしれません。次第に夫婦の関係性がギクシャクしていくのを感じました。

このままでは離婚の危機に陥ってしまう。この状態を打破するためにどうしたらいいのか？と考えた末に、私が出した答えは、離れて暮らすというものでした。蜜月期は終わったと感じていた私は、夫婦関係を永らえさせる道を探ったのです。

長年の夫婦カウンセリングの経験から、理想的な結婚の形は一つではないと悟っていたこともあり。特に夫が二回も年下だという場合、エネルギー量の違う2人が同じライ



フスタイルで暮らすのは難しい。離れて暮らし、いいとこどりをしたほうが得策なのではないかと考えたのです。

別居婚を始めましたが、週に1度は一緒にご飯を食べ、12年の6月には再びシンガポールの旅を楽しむなど、つかず離れず、それなりに仲良くやっていったと思います。

子どもを作りたい、それが無理なら里子を引きたいと考えていた時期もありました。ある日突然、「やっぱ妻は若くて可愛い方がいい」と夫が言い出したらどうしようという不安で眠れない日もあった。彼が

浮気しているという妄想が膨らみ、夫の車にGPSをつけたり、探偵を雇おうとしたこともあります。

こういう場合、もし離婚カウンセラーとして私が私にアドバイスするならば、真実を暴くか暴かないか、両方の選択肢を提示します。暴いて慰謝料をとって別れるか、あるいはあえて明らかにしないでおくか。

私は後者を選びました。だまされていてもかまわないから、一日でも長く、若くて素敵な彼との結婚生活を続けたい。おバカだけど、潔い女でいたかったのです。とはいえだんだん食事も喉を通らなくなり、8キロ

もやせてしまいました……。

24歳年上だという負い目は、思っていたより大きく、日増しに重くなっていた一方だと、のた打ち回っていたのです。しかも、その負い目を埋めるためには、年上の女房ならではの大きな武器にするしかない。と妄信し、自分を追い詰めていきました。器の大きいところを見せなくてはと、お金のふりや、細かいことは気にしないというふりをするのも大変で。そのせいか、その頃になると私は、夫婦という関係でいるのが難しいのなら、家族になればいいと考えるようになっていたのです。

それにより自分が楽になり、彼との関係がうまくいったかのように感じられました。去年の暮れも今年のお正月も一緒に過ごし、とても楽しかった。ナイトのように家まで送ってくれ、ハグをしてキスをして、おやすみなさい。それがあつこ、形はどうであれ、私たちが夫婦は続くと思っていました。けれどそれは、ご都合主義な私の心が生み出した幻想だったのでしょうか。

結婚も 離婚も 幸せの選択

冒頭でお話したように、2月5日に「離婚したい」というメールが届いたのですが、追い打ちをかける

ように「岡野あつこが離婚をする」という記事が週刊誌に掲載されました。私が衝撃を受けたのは、彼が結婚直後から、肌も話も合わない、とこぼしていた、そして私の干渉ぶりに辟易していたという彼の友人による証言、そして「一刻も早く人生の再スタートを切りたい」という彼自身のコメントでした。

でも思ったんです。本当に愛しているのなら、彼の望む生き方をさせてあげることが出来るはずなのではないかなって。それに私は、離婚カウンセラーとしていろいろ人の人生を背負っているのだから、もう夫に翻弄されてはいけないういうことにも気づいたので。結婚も離婚も幸せの選択。かくなるうえは、2人で乾杯して、お世話になった方々へ挨拶して……という新しい離婚を目指したいと思っています。

離婚に同意しますと伝えたあとに送られてきた彼からのメールには、「ありがと、人間として成長させてくれて。もつと優しくできなくてごめん。本当にすべてが良い思い出でした。子どもだったのかな、俺」と記されていました。時間が経てば、友達として良い関係を築くこともできるでしょう。夫婦として終わっても、憎み合うのではなく、夫婦として過ごした時間があるからこそ培える友情を夢見ています。